

## フォーラム

# 多分野の専門看護師のオンラインミーティングによる役割開発のピア・サポート会



片山 将宏<sup>1)</sup>, 小野 美雪<sup>2)</sup>, 大沼 順一<sup>3)</sup>, 河村 奈緒<sup>4)</sup>  
 國友 香奈<sup>4)</sup>, 栗林 佑季<sup>5)</sup>, 伊賀 規子<sup>6)</sup>, 立松 あき<sup>7)</sup>

<sup>1)</sup> 滋賀県立大学人間看護学研究院

<sup>2)</sup> 社会医療法人誠光会淡海医療センター

<sup>3)</sup> 社会福祉法人三井記念病院

<sup>4)</sup> 静岡県立静岡がんセンター

<sup>5)</sup> 兵庫県立こども病院

<sup>6)</sup> 市立岸和田市民病院

<sup>7)</sup> 日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院

**要旨** CNS は、所属組織内で活動するために役割開発が必要となる。これまでは、CNS による役割開発に関するサポートを所属組織内外で得られていたが、COVID-19 の影響で、所属組織外の CNS からサポートが得られにくい状況であった。そのような状況のなか、多分野の CNS によるオンラインミーティングを活用したピア・サポート会を開催した。ピア・サポート会では、認定年数の近い CNS が全国で役割開発のために奮闘され、頑張っていることを実感することができた。また、ピア・サポート会は、CNS メンバーにとってお互いに頑張ろうと思える場であったといえる。

**キーワード** 多領域の専門看護師、役割開発、ピア・サポート、オンラインミーティング

## I. 緒言

日本看護協会は、専門看護師 (Certified Nurse Specialist ; 以下、CNS と略す) を認定する制度が 1994 年に開始された。日本看護協会 (2023) によると、CNS は、現在 3,096 名であり、それぞれが臨床現場、教育現場等で活躍している。CNS は、14 分野に分けられ、分野で人数が多い順では、がん看護 1,036 名、精神看護 402 名、急性・重症看護 383 名、人数の少ない順では、放射線看護 3 名、遺伝看護 21 名、地域看護 30 名である。

CNS は、6 つの役割をもつ。6 つの役割とは、「実践」「相談」「調整」「倫理調整」「教育」「研究」である。しかし、CNS の資格を取得しただけでは、これらの役割をすぐに担うことは難しい。また、CNS は、所属する組織のニーズや組織文化などに合わせた独自の役割開発することが求められる。菊池 (2020) は、CNS は役割を理解してもらうために、自ら働きかけ看護師長会でのプレゼンテーションを行い、現場のニーズや課題の把握に努め、管理職へ働きかけ、サポートを得て病院全体をラウンド

し顔を覚えてもらい、認定看護師と協働している、と述

Peer support meetings for role development through online meetings of multi-area Certified Nurse Specialist

Masahiro Katayama<sup>1)</sup>, Miyuki Ono<sup>2)</sup>, Junichi Onuma<sup>3)</sup>, Nao Kawamura<sup>4)</sup>, Kana Kunitomo<sup>4)</sup>, Yuki Kuribayashi<sup>5)</sup>, Noriko Iga<sup>6)</sup>, Aki Tatematsu<sup>7)</sup>

<sup>1)</sup> Graduate School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

<sup>2)</sup> Omi Medical Center

<sup>3)</sup> Mitsui Memorial Hospital

<sup>4)</sup> Shizuoka Cancer Center

<sup>5)</sup> Hyogo Prefectural Kobe Children's Hospital

<sup>6)</sup> Kishiwada City Hospital

<sup>7)</sup> Japanese Red Cross Aichi Medical Center Nagoya Daini Hospital

2023 年 9 月 30 日受付, 2024 年 1 月 22 日受理

連絡先: 片山 将宏

滋賀県立大学人間看護学研究院

住 所: 彦根市八坂町 2500

電 話: 0749-28-8683

F A X: 0749-28-8470

e-mail: katayama.m@nurse.usp.ac.jp

べている。このことから、CNSの役割開発には、管理職者はもちろん、同僚やCNS同士のサポートが必要となるといえる。日本看護協会(2020)の調査では、活動にあたり、困難を抱えた際の相談相手は、直属の上司が最も多く、続いて所属施設外のCNS、同施設内のCNS(他分野)であったと述べている。しかし、2019年12月より、Coronavirus Disease 2019(以下、COVID-19と略す)の世界的猛威により、各学会学術集会などが中止および遠隔開催になり、所属施設外のCNSから役割開発に関するサポートが受けられにくい状況となった。このような、COVID-19蔓延のなかで、多分野のCNSメンバー(以下、CNSメンバーとする)によるオンラインミーティングを活用したピア・サポート会(以下、ピア・サポート会と略す)を定期的に開催した。ピア・サポートとは、同じ疾患をもつ患者や家族、あるいは職場の同僚など同じ立場の仲間同士の支えあいを表す。

本稿では、ピア・サポート会を開始した経緯や、活動内容について紹介する。

## II. ピア・サポート会を開始した経緯と第7回日本CNS看護学会学術集会での交流集会に向けての取り組み(2020年)

ピア・サポート会の最初のきっかけは、CNSメンバーの1名が第7回日本CNS看護学会学術集会での交流集会「役割開発/役割拡大どうする」を企画したことであった。第7回日本CNS看護学会のテーマが「CNSの継承」であったため、1回目の認定更新を受ける5年目までの若手CNSからも交流集会の企画を検討してほしいと打診があった。そのため、更新5年目までのCNSが所属組織でCNS活動をどのように展開しているかその実際を話題提供し、経験豊富なCNSからスーパーバイズを受けることで、CNS活動の展開する思考や方法を継承していく交流集会を企画した。田中(2015)は、自分なりのCNSのスタイルを見出し、役割獲得の感覚を得るまで、3年の月日を要する。その後、6~10年で自分なりの確固としたCNSの役割を獲得していた、と述べている。2019年当時に、CNSとして3年以上の経験を持ち、自分なりの確固たる役割獲得を目指して奮闘している9名のCNSメンバーが集結した。CNSメンバーの概要は、表1に示す。

交流集会では、役割開発・拡大中のCNSメンバー3名が活動をそれぞれ10分で発表し、ディスカッション、スーパーバイズを受ける。その後、グループディスカッションという内容を予定していた。2019年10月16日にCNSメンバー5名が対面でのミーティングを行った。次に、2020年1月12日にCNSメンバー3名

表1 CNSメンバーの概要

CNS 領域	CNS 認定年度
がん看護	2014年
がん看護	2017年
がん看護	2017年
精神看護	2017年
慢性疾患看護	2013年
家族支援	2015年
母性看護	2015年
老人看護	2015年
小児看護	2015年

で2回目の対面でのミーティングを行った。さらに、3回目の対面のミーティングを計画していたが、すでに、COVID-19の猛威もあり、CNSメンバーの体調面の不安だけでなく、日本全国から集合する時間の確保が難しいこと、費用面の負担などを考慮して、ZOOMを用いたオンラインミーティングを行った(表2)。

2回目のオンラインミーティングでは、交流集会の発表者3名の発表内容の確認と意見交換を行った。発表者3名のテーマは、初期のCNS活動でつまづくことが多い「組織のニーズ把握」「チーム活動を通じた役割開発」「病棟所属CNSの役割獲得」とした。その後、参加したCNSメンバーから、発表者の頑張りを称える言葉かけや肯定的なフィードバックが行われた。浜田、高橋、庄司(2022)は、オンラインミーティングでは、相手の様子を読み取りにくく、話しづらいというデメリットを指摘している。しかし、他のCNSメンバーも発表者と同様に、役割開発に取り組むうえの苦しみ、難しさを感じていたことが、それぞれのCNSメンバーがピア・サポートの関係性を形成したと考える。自分なりのCNSスタイルを見出すまでの期間は、自身のCNS活動のプロセスを客観的に判断できる経験値が蓄積しておらず、これでよかったのか悩み葛藤することが多い。先輩や指導者ではない現在同じ苦しみ難しさを分かちあえる立場から、客観的なフィードバックが受けられるピア・サポート会では、相互にエンパワーメントされる場となったと考える。

しかし、第7回CNS看護学会の交流集会は、COVID-19の影響で中止となった。3回目のオンラインミーティングでは、今後のピア・サポート会の方向性について意見交換した。当初、CNSメンバーは9名であったが、体調が思わしくないため1名から脱退の申し出があった。

表 2 オンラインミーティングの概要

開催日	参加者	ミーティング開催の主な目的
1 回目 2020年02月29日	6名	第7回日本 CNS 学会学術集会交流集会についての企画検討
2 回目 2020年03月28日	9名	第7回日本 CNS 学会学術集会交流集会で発表予定だった役割開発について発表 (3名)
3 回目 2020年09月20日	7名	今後の方向性についての検討
4 回目 2020年12月06日	6名	役割開発について発表 (1名)
5 回目 2020年12月27日	6名	第8回日本 CNS 看護学会学術集会演題発表についてのプレゼンテーション (1名)
6 回目 2021年04月24日	議事録がないため不明	第8回日本 CNS 看護学会学術集会発表用パワーポイントについて①
7 回目 2021年05月16日	議事録がないため不明	第8回日本 CNS 看護学会学術集会発表用パワーポイントについて②
8 回目 2021年08月09日	議事録がないため不明	役割開発について発表 (1名)
9 回目 2021年12月19日	5名	役割開発について発表 (1名) 今後の方向性についての検討
10 回目 2022年3月20日	7名	役割開発について発表 (1名) 今後の方向性についての検討
11 回目 2023年2月19日	5名	役割開発について発表 (1名)

交流集会のために集結した CNS メンバーであったが、第8回日本 CNS 看護学会学術集会でもう一度交流集会を行う方向性と研究発表の2つを行うことで一致した。また、オンラインミーティングでは、CNS メンバー1人ずつが役割開発について発表し、CNS メンバー間で意見交換を行い、その時に CNS メンバーそれぞれが感じた感情について話し合うこととなった。

### Ⅲ. 第8回日本 CNS 看護学会学術集会の演題発表に向けての取り組み (2021年)

5回目のオンラインミーティングでは、第8回日本 CNS 看護学会学術集会の演題発表者であった CNS メンバーが自施設での役割開発について発表し、ほかの CNS メンバーと意見交換を行った。2回目のオンラインミーティングと同じ進行で行ったが、CNS メンバーからは、「私も実は…」といった発言が見られた。これは、オンラインミーティングを重ねることで、本音で話せる、否定されない場となったと考える。このように、オンラ

インミーティングであっても、CNS メンバーは、この場だから話せる信頼関係が構築されていたと考える。

6回目、7回目のオンラインミーティングでは、演題発表者の発表用パワーポイントについて検討した。そして、CNS 看護学会学術集会の演題発表も無事に終えたことにより、ピア・サポート会が集結する理由がなくなった。9回目のオンラインミーティングは、これまでと同様に、CNS メンバー1名が自施設での役割開発について発表した。この時、CNS メンバーで今後の活動について話し合った。CNS メンバーのなかでは、新しい CNS メンバーを追加するといった意見も出るなかで、「ここだけの話」ができる今の CNS メンバーを大切にしていきたいという意見でまとまった。また、このピア・サポート会を活動報告として可視化したいという意見が出たことから継続することとなった。

### Ⅳ. ピア・サポート会の継続

10回目のオンラインミーティングも、これまでと同

様に CNS メンバー 1 名が自施設での役割開発について発表し、他の CNS メンバーと意見交換した。この時、CNS メンバーからは、当初の目的を達成したとして解散という話があがった。すでに、初めのオンラインミーティングから、2 年が経過しており、それぞれの CNS メンバーが更なる役割獲得に向けて奮闘していることからオンラインミーティングを継続する理由が失われていた。CNS メンバーからは、学会等での交流集会では、1 回きりで完結するが、集まり続けていることは、多分野の CNS メンバーが本音で話せる場、安心できる場であるという意見があった。ピア・サポート会について、CNS メンバーの思いを話し合った結果、最後にこの活動を可視化するという意見でまとまった。

11 回目のオンラインミーティングは、これまでと同様に 1 名の CNS メンバーが発表し、他の CNS メンバーと意見交換した。それぞれの CNS メンバーは、約 3 年間の役割の変化や新しい部署への異動に伴い、さらなる役割開発に挑戦していることが紹介された。最後に、発表者より、職場ではできなかった話がこの場でできて楽になったと話された。

## V. ピア・サポート会の活動を通じての振り返り

今回、本稿をまとめるにあたり、これまでの議事録、メールを読み返して一番感じたのは、「CNS 活動の上での刺激になった」ということである。ピア・サポート会では、お互いに連絡を取り合うことで、認定年数の近い CNS が全国で役割開発のために奮闘され、頑張っていることを実感した。ピア・サポート会は、CNS メンバーにとってお互いに頑張ろうと思える場であったといえる。オンラインであっても話をすることで、こんな考え方があるのだ、こういうふうに考えてみると良いのかな、等とそれぞれにはなかった考え方に触れ、視野が



第 10 回日本 CNS 看護学会(2023 年 8 月 23 日)にて CNS メンバーで写真を取りました(左から伊賀規子, 片山将宏, 立松あき)。

広がるのを感じる場であったと考える。

COVID-19 の影響により、第 7 回 CNS 看護学会の交流集会が中止になった。このように、新しいことに挑戦しても、どれだけ頑張ってもうまくいかないことがあっても、形を変えながら次に挑戦する力を CNS は持っていることをピア・サポート会で実感することができたと考える。馬場、齋藤、田中、丸山(2013)によると、5 年以上の CNS は、5 年未満の CNS より有意に職務満足度が高い、と述べている。このことから、役割開発に奮闘する 5 年未満の CNS の場合、同じ境遇のなかで奮闘する CNS 同士のピア・サポート会がエンパワーメントする場になることが期待される。

今回、多分野の CNS によるピア・サポート会をオンラインミーティングで行ったが、今後は、CNS 同士であればオープンに参加できるピア・サポート会の開催を検討したい。例えば、日本 CNS 看護学会などの交流集会で顔つなぎになった CNS が気軽に参加できるピア・サポート会の開催などを企画できればと考える。また、他でも同様に、CNS によるピア・サポート会は存在すると考える。今後は、CNS によるピア・サポート会の実態調査や、ピア・サポート会による成果を明らかにしていきたいと考える。

## 文 献

- ・馬場薫, 齋藤深雪, 田中幸子, 丸山幸恵(2013). 病院に勤務する専門看護師の職場環境の実態と職務満足度との関連. 日看研会誌, 36(2), 95-104.
- ・浜田百合, 高橋直己, 庄司裕子(2022). オンラインと対面による合意形成プロセスの比較. 日本感性工学会論文誌 21(1), 41-48.
- ・菊池和子(2020). A 県内のがん看護専門看護師の役割開発. 岩手看護学会誌, 14(1), 53-62.
- ・日本看護協会(2020). 2019 年度 専門看護師活動実態調査結果(第 1 報). 1-11. [https://www.nurse.or.jp/nursing/wp-content/uploads/2020/04/cns\\_katudoujittaityousa\\_kekka\\_0420.pdf](https://www.nurse.or.jp/nursing/wp-content/uploads/2020/04/cns_katudoujittaityousa_kekka_0420.pdf) (閲覧日 2023 年 9 月 11 日)
- ・日本看護協会(2023). 資格認定制度専門看護師・認定看護師・認定看護管理者. <https://nintei.nurse.or.jp/certification/General/GCPP01LS/GCPP01LS.aspx> (閲覧日 2023 年 9 月 11 日)
- ・田中久美子(2015). 日本の専門看護師が役割を獲得するまでの内面的成長プロセス. 日看研会誌, 38(1), 127-137.